

SDGs 達成に向けた生物文化多様性イベント —伊勢・三河湾流域圏の事例より—

○古澤 礼太（中部大学 国際 ESD・SDGs センター）

キーワード：「生物文化多様性」「生物多様性」「祭礼」「持続可能な開発目標（SDGs）」
「持続可能な開発のための教育（ESD）」「ESD 地域拠点（RCE）」

【1】目的

本研究の目的は、国連が提唱する持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDGs）の達成に寄与する教育プログラムの開発である。文化の多様性および自然環境（生物）の多様性の両方を保全・尊重する価値観の醸成を目的とする ESD（持続可能な開発のための教育：Education for Sustainable Development）の手法を検討・実施し、その効果を検証する。

本発表では、上記目的の実践事例として、中部 ESD 拠点協議会が主催する「SDGs の達成に向けた日本の祭りと生物多様性保全プロジェクト」を研究対象としてとりあげる。とりわけ、プロジェクト内で実施しているワークショップに焦点を当てて、SDGs の同時達成に向けたイベントの有効性を検討する。なお、同プロジェクトはトヨタ環境活動助成を受けて 2021 年度から 2022 年度まで実施中であるため、本発表は中間報告として位置づけ、これまでの活動の成果と課題をあきらかにする。

【2】方法

本研究の方法は、中部 ESD 拠点協議会事務局長の立場から、プロジェクトの立案、実施、評価に関わる参加型調査である。プロジェクトは、祭りにもちいられる生物の調査と、それらの利用や生育環境について学ぶワークショップの開催を通して、生物文化多様性の重要性を理解し、保全することを目的としている。

同プロジェクトでは、主に SD ゴール 11 番の「まちづくり」に貢献する地域の祭礼と、ゴール 14 番「海の自然」および 15 番「陸の自然」の保全に向けた生物多様性の課題を同時に取り扱う。対象地は、愛知県・岐阜県・三重県にまたがる伊勢・三河湾に注ぎ込む河川流域一帯（伊勢・三河湾流域圏）とした。

企画立案の背景には、国連大学および生物多様性条約事務局（CBD）が提唱する「生物文化多様性（Bio-cultural Diversity）」保全の考え方がある。生物多様性と文化多様性は不可分の関係にあるため、個別に保全対策を考えるのではなく、同時に取り扱うべきであるという議論である（敷田 2014, 須賀 2013, 他）。

そこで、中部 ESD 拠点では、日本の伝統的な祭り（主として神事を含む祭礼）にもちいられる生物に着目した。それらは、祭具の素材、祭りのご神体、神に捧げる神饌、祭りの期間に地域住民が食す儀礼食の食材に分けられる。

ワークショップの開催に向けて、事前調査に基づき、SDGs の課題と関係の深い生物や環境を選んで、教材作成と講師の選定をおこなった。ワークショップでは、祭り関係者と生物・環境に関する有識者の両方を講師として招聘した。祭りにもちいられる生物の役割や特性を紹介するのみならず、それらの生育環境の劣化や生産量の減少など、今日的な環境問題について同時に学ぶことができるプログラムを構成した。

【3】結果

2021年4月から現在に至る研究期間中に、6回のワークショップを開催し、森・川・里・海からそれぞれ祭りにもちいられる自然資源を取り上げた。それら生物は、森から1件（犬山祭りの山車にもちいられるヒノキ）、川から1件（須成祭のご神体となるヨシ）、里から1件（てんてこ祭りにもちいられるダイコン）、海の自然から3件（亀崎潮干祭で食されるアサリ、豊浜鯛まつりのタイ、四日市富田地区の鯨船行事のクジラ）であった。

ワークショップのプログラムは、午前中に座学、午後に各種作業をおこなった。座学では、毎回、祭り保存会のリーダーと、生物・環境の専門家から講演を受けた。後半の作業は、森林の間伐や鯛まつりの張り子作成、川下りとゴミ拾い、まち歩きなどをおこなった。

ワークショップの参加者は、平均すると各回約25名で、その内訳は、SDGsに関心を持つ人々が約8割、祭り関係者が2割であった。

各回の教材は、祭りの文化的側面と、とりあげる生物の生態や生育環境に関する課題についてまとめ、A3サイズ見開き4頁のパンフレットを作成・配布した。

【4】考察

本プロジェクトは、生物多様性と文化多様性を同時に学ぶことを目的に実施したが、ワークショップの実践から以下の3点が示唆された。第一に、異分野間の課題の相互理解である。生物多様性保全活動は、生き物に関心のある限定的なグループに閉じられる傾向にある。他方、祭りの次世代への継承問題などの課題が共有された。第二に、祭り関係者による生物多様性保全理解の促進である。祭り関係者は、祭りにおける生物や自然との共生や尊重の意義を理解しているものの、それら生物の生育環境の劣化や環境問題については情報が不足している場合が多い。ワークショップを通して、環境問題について学ぶ機会となった。第三に、異分野間の交流促進である。SDGsおよび環境問題に関心を持つ参加者は、祭りの魅力を知り、他方で、祭り関係者は地域の自然環境保全の視点が芽生えたことによって双方の交流促進の契機となった。

【5】結論

本プロジェクトは継続中であるため、対象地域である伊勢・三河湾流域圏全域の生物文化多様性の包括的理解には至っていないが、ワークショップを通して、文化と生物（自然環境）の多様性を同時に学ぶ機会が提供された。今後は、祭り関係者のさらなる巻き込みと協働の仕組みづくりが課題である。